

「白布に祈る」

—初稿—

2026/8/18

雨森 れに

〈人物表〉

鹿俣 かまた

しほり

（21）大学4年生

森谷 もりや

アイシャ

（42）パキスタン人。ムスリム。沙羅の母

森谷

清美 きよみ

（70）沙羅の祖母

森谷

啓樹 はるき

（45）沙羅の父

森谷

沙羅 さら

（享年21）大学4年生。しほりの友人

1. 森谷家・二階・アイシャの部屋（夜）

薄暗い和室。

パキスタンの小物や調度品が置かれている。

礼拝マットの上で森谷アイシャ（42）が礼拝中。

アイシャ「ビスマッラー・ヒッラフマー・ニッラヒーム」

T 「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」

2. 森谷家・玄関・外（夜）

住宅街に建つ、二階建ての古い一軒家。

玄関に忌中札。

鹿俣しほり（21）、インターホンを押す。

玄関が開く。

しほり、入っていく。

3. 森谷家・仏間（夜）

仏壇の前に棺。祭壇には森谷沙羅（21）の遺影。

しほり、祭壇を見て戸惑う。

沙羅の祖母・森谷清美（70）、座布団を出す。

清美 「どうぞ。うちは浄土宗なんです」

しほり 「あの、沙羅さんはムスリムでしたよね？ 最期もそうするのとはかり……」

清美 「イスラム教でなんてやりません。これ以上、その話はやめてくださいな」

と、棺の小窓を開ける。

しほり、覗き込む。

沙羅の安らかな顔。

清美 「心臓発作とは思えないでしょう」

しほり 「寝てるみたいですね」

天井がミシッと音を立てる。

二階から、外国語の祈りが聞こえてくる。

しほり、上を見る。

しほり 「お母様が？」

清美、頷く。

清美 「毎日毎日、欠かさずですよ」

しほり「懐かしいです。沙羅もやってみました」

清美、嫌そうな顔。

清美「母親はあんなだし、父親は出張で帰ってこない。この子は、沙羅は、本当に可哀想な子ですよ」

天井がまた音を立てる。

ふたり、上を見る。

しほり「不躰なお願いかもしれないんですが」

清美「なんですか？」

しほり「沙羅さんのもの、何かいただけないでしょうか。覚えていたくて」

清美「……二階に行きましょうか。沙羅の部屋があります」

清美、立ち上がる。

4. 森谷家・沙羅の部屋（夜）

整えられた部屋。

窓辺にアクセサリーケース。

しほり、アクセサリーケースを開ける。

窓の外で森谷啓樹（45）が布団を運んでいる。

啓樹と目が合う。

しほり、軽く会釈。

視線をケースに戻す。

金のチェーンネックレスを見つけ、息を飲む。

ネックレスを手に取り、

しほり「これ、いいですか？」

清美「ええ。貰ってちょうだい」

しほり、ネックレスをつける。

5. 森谷家・仏間（夜）

しほりと清美が戻る。

アイシャ、棺の前に座っている。

清美「ようやく降りてきた！ あなたって人は！」

清美、棺に近づく。

その足が止まる。

棺の蓋が開いている。

清美「どこへやったの……？」

しほり、棺を覗き込む。

沙羅がいない。

6. 森谷家・玄関・外（夜）

しほり、玄関から出てくる。

家の中から、清美の泣き声。

しほり、ゆっくりと玄関の戸を閉める。

そのまま歩き出す。

7. 道（夜）

しほり、森谷家から離れていく。

少しずつ歩く速度を上げる。

角を曲がる。

人通りはない。

数メートル先に、一台のバン。

8. 車・車内（夜）

しほり、助手席に乗り込む。

啓樹、車を発進させる。

しほり、後部座席を見る。

フラットにされた座席。布団に包まれた沙羅。

啓樹「お疲れ様」

しほり「啓樹さんも、お疲れ様です」

しほり、首のネックレスに触れる。

啓樹「それ、沙羅が高校卒業するときに買ってあげたやつだ」

しほり「えっ、あの、すみません！ お返しします！」

啓樹「いいの、いいの。しほりちゃんが使ってよ」

しほり、複雑そうに微笑む。

しほり「ありがとうございます」

啓樹「こちらこそ、ありがとう」

9. しほりの家・室内（夜）

マンションの一室。

玄関に、しほりと啓樹の靴が脱いである。
奥から、しほりの声。

しほりの声「こっちです。浴槽にそのまま……」

啓樹の声「おっと……よし、いいぞ」

10. しほりの家・風呂場（夜）

湯船に服を着たままの沙羅。

啓樹、沙羅の頭を撫でる。

啓樹 「大きくなったなあ……」

インターホンの音。

啓樹、沙羅の頭から手を離す。

風呂場を出ていく。

しほり、沙羅を見つめる。

11. （回想）カフェ・店内（昼）

大学内のカフェテリア。

沙羅としほり、旅行雑誌を広げている。

沙羅「日本でムスリムらしく生きたいんだよねえ」

沙羅、満面の笑み。

首にはネックレスが光る。

（回想終了）

12. しほりの家・風呂場（夜）

しほりの首のネックレスが光る。

ノック音。

アイシャ、入ってくる。

アイシャ「しほり、ありがとう」

しほり「おばあ様は？」

アイシャ「話してきた。だいじょうぶ」

アイシャの頬が赤く腫れている。

アイシャ「グスル、大変だけど、ごめんね」

しほり「沙羅が、そう思ったかと思うんで」

アイシャ「きつと、喜ぶね」

アイシャ、沙羅の服を脱がせていく。

シャワーの音。

しほり、水を張った洗面器に乾燥させたシドルの葉を揉み入れる。

アイシャ、その水で沙羅を清めていく。

しほり、必要なものを手渡していく。

ふたりの額に汗。

13. しほりの家・室内（夜）

シーツのような白い布が広げてある。

啓樹、タオルで巻かれた沙羅を運んでくる。

白布の上に、沙羅を寝かせる。

啓樹、沙羅を見ないようにし、離れる。

アイシャ、沙羅を白布で包んでいく。

しほり、手を添える。

衣擦れの音。

アイシャ「できた」

白布の中に、沙羅の輪郭だけが残る。

しほり「……ムスリムは、死んだらどうなるんですか？」

アイシャ「アッラーの元に帰る」

しほり「アイシャさんはまた会えますか？」

アイシャ「会えたらいいね」

アイシャ、微笑む。

14. 車・車内（早朝）

しほり、運転している。

後部座席に、白布に包まれた沙羅。

その両脇にアイシャと啓樹。

15. 道（早朝）

森谷家前の道。

バンが停まる。

アイシャと啓樹、降りる。

啓樹、玄関を開ける。

アイシャ、バンの後部ドアを開ける。

二人、家へ向かう。

16. 車・車内（早朝）

しほり、バックミラー越しに後部座席を見る。

× × ×

沙羅 「日本でムスリムらしく生きたいんだよねえ」

しほり 「そのためのパキスタン旅行なんでしょ？」

沙羅 「そ！ 私のルーツを知る旅。ね、いつにする？」

× × ×

後部座席にあるのは、白布に包まれた沙羅。

しほり、前を向く。

首のネックレスを握る。

（おわり）